特集 語彙力

語彙の効果的な定着の仕方

岸本映子
（大阪市立港南中学校）

1. 中学校での語彙の指導

中学校での英語教育は音声，語彙，文法が中心です。この中で語彙の指導については，あまり体系的に指導されていることは少ないようです。また学習方法も学習者個人にまかされているのが現状ではないでしょうか。

言語活動をする際に，学習者に言語材料である語彙数が少なければ，有効な活動ができないし，また達成感も生まれてこないでしょう。ここでは実践している語彙の指導について，いくつかの例を示してみたいと思います。

2. 語彙の構造化の工夫

語彙は文脈の中で，文字，音と意味が結合して提示されることが必要です。それらの定着は反復練習によって暗記する場合が多いです。しかし語彙の数が増えてくると，バラバラな知識の暗記は学習者の負担となります。つまり覚えた語彙が学習者の中でよく体系化，構造化されていない場合は，その語彙を長期的に覚えておくことは難しいのです。

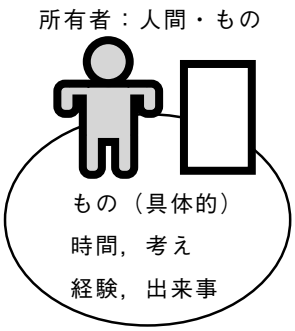
ここでは語彙のコアの意味理解やカテゴリー分類などによる語彙の関連づけによって，語彙を構造化し，増やす方法を提示したいと思います。

① コアの意味理解

コアの意味理解を使った語彙指導とは，ある語について複数の訳語を暗記させるのではなく，コアの意味だけを理解させておいて，あとはコンテクストから判断して意味を考えさせるやり方です。

have の意味を「持つ」としか知らない場合は，プロダクションの場面で困ることが多いです。例えば「頭が痛い」を表現したい学習者は，「head はわかるけれど『痛い』がわかりません」と言う場合が多いです。そこで「痛み」を加えた複合語の a headache を知っても，次は「頭痛がする，の『する』がわかりません」となります。このような場合に対応できるのがコアの意味理解です。例えば，動詞 have の意味を次のように指導します。

［図１］have 所有



have は所有者が自分の支配する領域に何かを取り込むことであり，所有者はこの領域にあるものを自由にできます。基本的にはものの所有ですが，時間や経験といった抽象的なものの所有も可能なことを説明しておきます。そうすると「頭が痛い」や「楽しいひとときを過ごした」という次のような表現も理解しやすくなります。

I have a headache.

I had a good time.

飲食物を所有者の体内に取り入れると I had coffee. のように「食べる」「飲む」という意味が出てきます。また所有者が人間に限定されないことを知っておくことも大切です。

The car has a good radio.

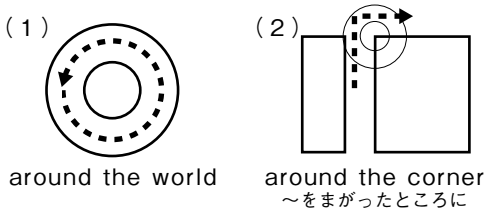
この場合，所有者は車で，「その車にはよいラジオ

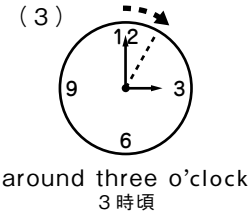
がついている」という意味です。

haveのスキーマ（図1）は所有者による支配という捉え方を示していますが，一方，日本語表現は「頭が痛い」「頭痛がする」のように，そのものが自ら「～になる」という表現が一般的です。つまり所有者による支配（支配領域へ取りこみ）の捉え方がありません。この違いを認識しておかないと英語表現は難しくなるでしょう。このように基本的語彙のコアの概念を提示することによって，多くの意味を理解させることが可能になります。

次はaroundの場合です。aroundのコア概念は「～の周囲に」です。さらにaroundの場合は「焦点化」ということも重要になります。基本的なスキーマは図2（1）ですが，話し手の焦点を当てる部分によっていくつかの意味が派生してきます。

［図2］around ～の周囲に





「～をまがって」や「およそ」という意味は学習者には覚えにくい意味と受け取られますが，周囲のある一部分が焦点化されていると捉えるとわかりやすくなります［図2（2），（3）］。

② 語彙のネットワーク構造化

語彙を増やすときに，カテゴリー分類と対立・類似概念から指導を行うと，学習者の中で語彙の体系化がしやすくなると考えられます。

a. カテゴリー分類

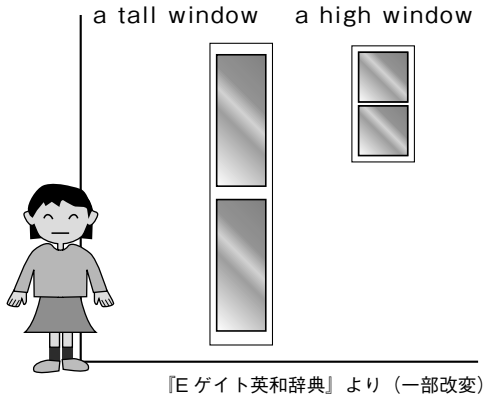
［動詞＋er］で人を表す場合（swimmer, teacher）や［dis＋動詞］で否定を表す場合（disappear，disagree）などは，接頭辞や接尾辞でまとめることによって語彙の増加を図ることができます。

b. 対立・類似概念

反対語や同意語によっても語彙の増加が図れます。その際その語彙のコア概念を提示して，焦点化される範囲の違いを説明すると知識の構造化に有効ではないでしょうか。

例えば，tallとhighは類似概念ですが，tallは下からの高さの「距離」が焦点化され，highは「位置の高さ」が焦点化されて用いられていることを次のような絵を用いて説明することもできます。

［図3］tall ── high



『Eゲイト英和辞典』より（一部改変）

また，tallの反対語shortについても言及できます。これらを指導する際に，形容詞の「非対称性」についても言及しておくよいと考えます。例えば背の高さをたずねるときには次のように表現します。

How tall are you? I'm 160 centimeters tall.

相手が小柄な人であってもHow tall...であり，How short...とはなりません。これが形容詞の「非対称性」です。私は学習者に以前「なんで，赤ちゃんの年を言うのにoldを使うの？　youngやのに」と聞かれました。反対語であっても役割は等しいとは限らず，程度の高いほうがその尺度を代表しています。このような知識は語彙理解を深め，定着につながりそうです。

【参考文献】
田中茂範ほか（2006）『英語感覚が身につく実践的指導』大修館書店
田中茂範ほか（編）（2003）『Eゲイト英和辞典』ベネッセコーポレーション

MOCHIZUKI MASAMICHI
HIDAI SHIGEYUKI
ISHII TORU
KISHIMOTO EIKO